

第十五回 岡山県

「内田百閒文学賞」受賞作品集

《最優秀賞》
たまゆら湾

江口ちかる

著者略歴

江口ちかる（えぐち・ちかる）

昭和三十六年七月二十五日 兵庫県生

京都府立大学女子短期大学部国語科卒

現職…会社員

受賞歴…平成十七・十九年度 岡山県文学選奨小説部門 佳作

平成二十年年度 岡山県文学選奨川柳部門 入選

第十四回 岡山県「内田百閒文学賞」優秀賞

『たまゆら湾』 K

おまえんち、カラーテレビあるんじやろ。

学校の廊下で上級生に話しかけられた。

昭和三十七年、三石食堂の息子明は中学二年になったばかりだった。

ひとまわり大きなからだつきの砲面ニギヒツツが明を見下ろしていた。

耐火煉瓦工場に勤める、食堂の常連客の子どもだ。卑屈な笑みを浮かべる明の心に、

どんよりとした鈍色の雲が垂れていた。

お客さんに感謝せられえが両親の口癖だった。

明には両親を困らせるほどの反抗心はない。

ええなあ。俺もカラーテレビ見たいわ。

上級生は軽く明の肩を叩き、おーいと遠くへ声をとばしつつ後方へ走って行った。

明は拍子抜けした。何かいやなことを言われると身構えていたのだ。

小さい頃から警戒心が強かった。

赤ん坊の明をあやそうとした人は根負けし、人見知りは賢い証拠じゃと笑うしかなかった。

成長してからも人は悪いものだと思いがちだった。だが人は意地悪をするほど自分に関心がないのだと明は最近思うようになっていた。

土曜日で学校は昼までだった。明はぶらぶらと帰途についた。

すぐに背が伸びるからとすすめられた学生服は一年以上経ってもだぶついたままだった。

幼い頃から何をするのも遅かった。歩きだすのも語り出すのも駆けっこも。

早生まれじゃけ、と母は明と自らを励ますように笑った。父の方は、死ぬまで早生まれじゃ、と呆れていた。

見馴れた三石の風景がひろがっていた。

三石は山間の町だった。

くねくねとのびる国道二号線と、その両脇に続く暗い緑の山々。

低くつらなる山の姿を大人たちは仏さまの寝姿になぞらえた。

道沿いの家々やその奥に点在する家。そのなかから煉瓦の煙突がにゅつとのびている。

三石は四十を超える鉱床を抱く山々がつらなる鉱山町で、世界的に見ても有数の蠟石の産地だった。

蠟石はチョークの原材料にもなった。

明治維新ののち学校制度ができ、チョーク製造がさかんになった。

やがて蠟石に耐火物用としての特性がわかり、耐火煉瓦の製造工場ができた。備前焼の窯の存在と豊富な鉱床は耐火煉瓦の産業を成長させた。

戦時中には軍艦のボイラーの反射炉としての需要も大きかったのである。

三石食堂の客の多くは、そうした工場の勤労者たちだった。

快活で男くさい客たちは明を萎縮させた。

道の先に四角い照り返しが見えてきた。

三石食堂のショーケースだ。

日に焼けた食品サンプルと手書きのおしながき、土人形やプラスチックの桔梗の花が並んだ空間だ。

駐車スペースには自転車がばらばらと停まっていた。

近くに耐火煉瓦の新工場が建ってから食堂は忙しくなった。

うどんや野菜炒め、かやくごはんが売れ筋だった食堂が揚げ物の定食をどんどん作るようになり、壁も天井も母の割烹着もすっかり油臭くなった。

工場も土曜日は午前中しか稼働しない。

土曜日で帰宅するばかりの常連たちは瓶ビールを傾けているのかもしれない。

「ただいま」

居住空間は食堂の奥にある。明はぺこりと頭を下げ客の傍らを通った。

「よお、学校はどうや」

馴染みの客が明の尻をはいたい。

明はうつすらと笑みを浮かべ、どうも、と口のなかでもごもごつぶやいた。

「明、お客さんが尋ねてじゃ。はつきり答えんか」

厨房から父の高い声が飛ぶ。

「いやいや、ええんじゃ」

客が笑むのを確認して明はもう一度頭を下げた。

足早に奥へ進み、自宅部分につながるドアを開け、音を立てないように閉める。

厨房の横にあたるスペースは居住スペースへ続く土間になっている。

客と父の会話が明を追いかけてきた。

「まだまだうぶこいなあ」

「何を考えとるんかわからんわ」

「成績はいらしいやないか」

「スポーツでもしてくれたらええんじゃが、もやしのように」

明はため息をのみこみ、両足を擦り合わせ白いズックを脱ぎ落とした。

「卓袱台に昼ごはんおいてるで」

母が厨房から土間へ顔をのぞかせていた。光を背負った母はぼんやりと輪郭だけになっている。

母が厨房から声をかけるのは明が浮かぬ顔をしているときだ。客に尻をはたかれ

でも卑屈に笑っているような日だ。

卓袱台には明が好きなちゃんぽんがあった。かまぼこや豚肉や野菜がたっぷり載せられたちゃんぽんの丼には、最近使うようになったラップがかけられている。ラップを取るど食欲をそそる匂いがあふれたち明は一気にちゃんぽんをたいらげた。

建て増した小さな二階に明の部屋はあった。

和室に学習机と本棚と箆笥が置かれている。部屋ができたときにかけられたままのカーテンは子どもっぽい動物柄だ。押入に収める時間がなくて三つ折りにしただけの布団に寝間着がくしゃつと載せられていた。

制服を壁に打ち付けられたフックにかける。制服はまだ風の匂いがした。

二階から小さな畑越しに離れが見える。野菜のやわらかな畝のうえに食堂の影がのびていた。

離れにはかつて母方の祖父が寝起きしていた。明をかわいがってくれた人だ。快活でもの識りで、やさしい人だった。

今は年が離れた従兄の弘が離れを占領していた。

明は弘が好きになれなかった。

その弘が祖父のいた空間をわがもの顔にしていることも明を苛立たせた。両親が弘をかわいく思っているらしいのが理解できなかった。食堂のカラーテレビは弘とともにやってきた。

羽振りのいい弘の父が、弘を預ける礼だと送ってきたのだ。中古品を安く譲り受けたいらしいが、カラーテレビはとつてもなく高額だった。そんな余裕があるなら息子を近くにおいて養えばよさそうなのである。どうやら弘は地元でトラブルを抱え、三石に来たらしい。明の父が頼みこみ耐火煉瓦工場で不定期の配送の仕事に就いていた。カラーテレビの到来に両親がはしゃぐさまは奇異に思えた。父は食堂の一段高くなった畳のスペースにテレビを置いた。

カラー放送はまだ少なかった。NHKと首都圏の民放四局を合わせ、放送時間が週に三十時間にも満たなかった頃だ。岡山県の民間放送はまだ白黒のみだった。またカラー放送は外国のカラー映画かスポーツ番組がおもて、画像も素晴らしいとはいえなかった。スイッチを入れればすべてカラー放送が映ると思っ込んでいた両親は落胆した。だがカラーテレビがあるだけでめずらしかったのだ。

上背があり彫りの深い顔立ちの弘は「食堂の男前」と呼ばれるようになった。